

山里純一著

『沖繩のまじない―暮らしの中の魔除け、呪文、呪符の民俗史―』

都 築 晶 子

山里純一氏はほぼ二十数年間に亘って「符札（フーフダ）」を中心に、沖繩の多様な「まじない」について研究を進めてきた。呪符を記す媒体には、本土では古代中国には木片、近世以降には紙片が用いられてきたが、沖繩では現在に至るまで木片が使用されてきた。フーフダはこの呪符を記した木片のお札をいう。沖繩の「まじない」研究は、戦前にも数少ないながら、たとえば氏も紹介している佐喜眞興英氏による調査などがある。一九六〇年代後半以降、窪徳忠氏によって沖繩の石敢當、紫微變駕、墓中符など中国由来の習俗が次々に明らかにされ

てきたが、九〇年代に入ると、従来あまり注目されてこなかった宗教関係資料の整理が進められるようになった。久米島の「上江洲家文書」「與世永家文書」「吉濱家文書」、沖繩本島の「金良家文書」など、琉球・沖繩の^{じかた}地方役人（地方の有力者、役人）の家や、占いをなりわいとするサンジンソウ（三世相）が所持していた家文書が公開され、その中にはさまざまな占卜や魔除け・呪符などの「まじない」に關わる抄本の資料が数多く含まれていた。氏はその中の主要な呪符集を鰻刻し、その多くを讀解するとともに、この呪符が用いられた空間、呪符

の製作者などについての調査も行ってきた。氏のフーフダにはじまったいわば文献と調査の両面からの研究は、やがて範囲を広げて「まじない」全般に及んでいる。現在では、沖繩のまじない研究の第一人者と言つてよい。

こうした研究の成果は、すでに『沖繩の魔除けとまじない—フーフダ（符札）の研究—』（第一書房、一九九七年二月）、『呪符の文化史—習俗に見る沖繩の精神文化—』（三彌生書店、二〇〇四年六月）としてまとめられている。本書はこれらの成果にその後の研究も加え、より廣く沖繩の一般の讀者にむけて再構成して執筆されたものである。目次は以下の通り（括弧内は項目表題の略記）。

第一章 呪文（くしゃみ、地震、雷鳴、火事）

第二章 沖繩のムンヌキムン（石敢當、シーサー、フーフダ、貝、ゲーン、ヒジャイナー、鹽・海水）

第三章 暮らしとまじない（紫微鑾駕、ハブ除け、蟲害除け、早魃と雨乞い、風のまじない、守り本尊と「首里十二ヶ所巡り」、ものもらい）

第四章 誕生と産育のまじない（妊娠・出産、胞衣の處理、名附けと鍋墨）

第五章 死・葬・墓のまじない（死と葬、ウティンジカビ、墓の魔除け、墓中符）

第六章 呪符をめぐる文化交流（道教のおふだ、琉球の「御守札」、蘇民將來符、九字）

附章 エッセイ（金門島の辟邪物と鎮宅符、わらべ歌に見える「札」）

目次を一瞥すれば分かるように、沖繩の暮らしの中に現在も息づいている多様な「まじない」について、呪文、ムンヌキムン（魔除け）、呪符などに分け、さらに箇條的に項目を立て、項目ごとに平易な解説を述べている。

たとえば、第三章に取り上げられる「ハブ除け」では、ハブが出没する屋敷やきび畑には呪符を書いたフーフダを立て、ハブの多い山道を行くときなどには呪文を唱えたという。こうした日々の暮らしやその空間、人生の節目となる誕生や死、死後の墓など、さまざまな場面に即

した呪文、魔除け、呪符などが列挙されている。ふと身の回りの「まじない」が何なのかを知らうとしたとき、その項目を見れば概要が分かるように工夫されており、いわば沖繩のまじない事典のような構成になっている。それだけでなく、琉球の時代から現在に至るまじないの歴史、フーフダなどに記された記號や文字の意味、使用される空間、さらには製作者の變遷をも窺うことができ、現在の沖繩の宗教事情を彷彿させるものともなっている。第六章では琉球のお札が中國のみならず薩摩からも影響を受けたことを紹介し、琉球・沖繩の歴史の重層性にも言及する。この第六章は、古代日本と琉球の交流を追究し、『古代日本と南島の交流』（吉川弘文館、一九九九年）などの專著もある氏ならではの視點であろう。平板なまじない事典ではなく、氏の長年にわたる研究に裏打ちされたものであり、その意味でも本書の意義は大きい。

ただし、幾つか氣になった點がないわけでもない。たとえば、「石敢當」について。明・徐燭の『徐氏筆精』は、人物事典ともいうべき明・楊信民の『姓源珠璣』に

記載された五代の勇士「石敢」の記事を「石敢當」と誤認して引用、魔除けの「石敢當」の由來とみなしている。ところが、この『徐氏筆精』とそこに誤って引用された『姓源珠璣』の記事は、江戸末期以降の日本の「石敢當」理解に大きな影響を及ぼすことになった。この経緯を説明した本書二八頁に、「『資治通鑑』『舊五代史』『新五代史』『冊封元龜』（「封」は「府」の誤ち）などに引用された『姓源珠璣』」とある。『通鑑』以下の史書や類書はいずれも宋代の成立、『姓源珠璣』は明代前半の刊行。とすれば「に引用された」ではなく「から引用した」とすべきである。もともと、この記述のもとになった『呪符の文化史』第Ⅱ部第二章「石敢當」には、「『姓源珠璣』の内容は『資治通鑑』『舊五代史』『新五代史』、『冊封元龜』などにも見える」とあり、本書の誤記は惜しまれる。さらに、司馬光撰『資治通鑑』本文には「石敢」の名はなく、同じく司馬光が『通鑑』と並行して執筆した『資治通鑑考異』に引く蘇逢吉『漢高祖實錄』にみえる。正しくは『通鑑』ではなく、『通鑑考異』である。ちなみに

に、『姓源珠璣』は目録の「勇士」の項に「石敢格闘」、本文にも「石敢」とあるが、本文前の小見出しが「石敢當」となっており、後代の人士の誤讀を招いたのである。

『四庫全書總目提要』子部・類書類存目一にはこの書がいかにも杜撰かを述べ、楊信民の見識をも難じている。

また、山里氏の撮影であろう寫眞が多數掲載されていて、沖繩のまじないの具體像を理解する絶好の手がかりになっている。ただ、残念なことに殆どの寫眞には、簡単な地名のキャプションが附されているだけである。

されば撮影年月、より詳細な地名の情報があった。これは、前掲の專著も同じ。調査した氏もまた痛感されていることであろうが、近年の沖繩の風景は急激に變貌

し、集落、通路、宅地、家屋の形状も多くがもとの姿をとどめておらず、たとえばフーフダや石敢當を置く空間も變容している。氏の撮影した寫眞はまた、近い將來、

二〇〇〇年前後の貴重な資料となるはずである。さらに、お札の製作者は古くからの寺社が多いが、昨今では本土から新たな宗派が流入しており、沖繩文化の細やかな脈

絡から乖離したお札が作成されていく可能性もある。その意味でも、寺社の製作したお札の寫眞にも撮影年月を明記してほしかった。

以上、幾つかの氣になる點はあるものの、文獻と調査、中國と本土という多面的な視角から描きだされた沖繩の「まじない」の手引書としての本書の意義を損なうものでは決してない。氏の今後の繼續的な研究と調査を切に期待したい。

最後に、「新刊紹介」と題しながら、本書の刊行からほぼ五年の歳月が過ぎ去ってしまった。遅延はひとえに評者の私的な事情によるものであり、著者の山里氏に深くお詫びしたい。

〔追記〕

本書はその後、副題を省いて『沖繩のまじない』と題し、「ボーダー新書」の一冊として再刊された（ボーダーインク、

（B 6 版、二三八頁、二〇一七年二月、
ボーダーインク、一七〇〇圓（税別）

二〇一九年三月）。新書化にあたって本書の本文にさし挟まれていた「コラム」の一部と附章の「エッセイ」が省略されているが、第一章から第六章までの本文、寫眞とキャプションはそのまま収録されている（新書版では本書の寫眞23、24のキャプションにホーチミン、ハノイという地名を附加）。